晨饌、夫人顧其弟曰、治妝未畢、我未及餐、爾且可點心、則此語唐時已然、

〔嬉遊笑覽十上飲食〕點心は野客叢書に、漫錄謂、世俗例以早晨小食爲點心、自唐已有此語、鄭修爲江淮留後、夫人曰、爾且點心、或謂小食、亦罕知出處、昭明太子傳曰、京師穀貴、改常饌爲小食、小食之名本此、といへり、空心にまつちとばかり物くふを點心といふ、今俗に虫おさへといふ類なり、こゝには飯後にくふ物をいへり、是も食後小食といへるに似たれども、食前にもあれ食後にもあれ、やうやう空心なる程にくふ食なるを、數多の料理喰て間もなく、又食はむ物をいふは、點心の本義にはあらじ、又佛事法會の終日の勤行に氣を屈する故、種々の物をこしらへ備るをもいへり、茶食とは名へかはれども、饅頭などはいづれにも用べし、此にて點心に用るは、大かた羹の類、麵の類に菜を添て食ひ、湯を飲ことなり、尺素往來にも、點心者○中略とあり、禪宗行はれて、是等の食物の法も傳へたるなるべし、但しもとは魚獸の肉を用ひしを、僧家には是を除きて製法をかへ、又こゝの人の口にかなふやうになし、又は其物の形色の似たるによりて、名ある物も有べし、後には名のみ同くて、物のいたくかはれるも有とみゆ、今の羊羹など是なり、

〔秋苑日涉八〕小飯非時

今僧家飯後食餅餌謂之點心、卽小食也、輟耕錄曰、今以早飯前及飯後午前午後晡前小食爲點心、唐史、鄭修爲江淮留後、家人備夫人晨膳、夫人顧其弟曰、治粧未畢、我未及餐、爾且可點心、則此語唐時已然、洪邁俗考曰、漫錄謂、世俗例以早晨小食爲點心、自唐已有此語、鄭修爲江淮留後、夫人曰、爾且點心、或謂小食、亦罕知出處、昭明太子傳曰、京師穀貴改常饌爲小食、小食之名本此、俗呼小錄曰、午前午後小食謂上晝點心下晝點心、註引昭明太子別傳曰、京師穀貴改常饌爲小食、卽點心也、明會典、四月八節端午節膳羞曰、小點心一楪、熙按、小食之名、漢以來已有之、周禮天官膳夫、凡王之稍事設薦脯醢、註曰、鄭司農云、稍事爲非日中大擧時而間食謂之稍事、稍事卽小食也、說文曰、䬵小食也、論語曰、肉雖多